

太子堂のお祭り

聖徳太子堂棟札によると、太子堂は文政年中、四興屋大工町に再建修繕したものの維持困難となり、明治三十六年五月、町内で相談の上、小林松右五門に任せることとなった。

松右五門は、自邸に移築し、二十余年の間、萱屋根を葺き替えて維持していたが、将来にわたって維持はむづかしいと判断し、松右五門養子慎吉は、大正三年瓦屋根に一斉を替えた。

(注)この萱は四つ屋根の上方部だけ瓦で下幹が全部瓦に変わり、現在の形となった。

そもそもこの太子堂については、

昭和八年五月二十三日、小林喜内長彦が施主となり、教護寺宿禰を法導師として、聖徳土宮太子新堂の入律が行われた旨の棟札がある。藩お堀之の棟梁を中心とし、大工衆が費用を出し合せて建てたものと思われる。(宮殿が延宝七年(一六六九)に製作されたという覚書があるが、これは再建がもしもない、場所は明らかでないが、施主が藩主ではないと推測される)

その後、五月二十三日を定め、代々の教護寺住職を迎えて太子堂祭りが行われるようになった。慎吉の時代には、幟を立て屋敷内に屋台店を入れ、賑やかな祭りの体となっていたという。

慎吉没(昭和十四年)後は、連水合の清が慎吉の意を継いで祀りを続けた。慎吉の弟子が来て幟を立て、賑わいの中に教護寺住職の饒経が流水たもようである。しかし、清も、慎吉の弟子も年をたいていくにつれ祭りの風景は変わった。幟を立てるすべなくなり、重なる教護寺住職もなくなったことで、清は二女の佐藤松瀬と姪の阿部要(ちんぎ)十里の助けを借りながら、大工町の昔の職人衆の赤二人つを集めて、赤飯をふるまい、菩提寺の極楽寺住職の饒経によって、何とか祭りの体を保ち続けた。